

# 言語転移と語順偏誤

——北星学園大学アンケート調査より——

山 本 範 子  
金 昌 吉

# 言語転移と語順偏誤

## ——北星学園大学アンケート調査より——

山本 範子  
金 昌吉 (大阪大学)

### 目次

1. 前言
2. 理論背景
3. 言語転移と語順偏誤
4. 習得・教学と偏誤分析

### 1. 前言

日中両国の言語はどちらも漢字を使用し、語彙の上からも多くの同じ、或いはよく似た部分がある。これは日本人学生が中国語を学習する際にある程度の便宜を与える。しかし同時に、この種の便利さは日本人学生が中国語を学ぶ上での非常に大きな障害にもなっている。というのも、同じ或いはよく似ているので、始めたばかりの時は中国語を外国語と見なして学ぶことができない日本人学生が多いからである。また、次のように言うこともできる。多くの日本人学生は中国語を学ぶ原動力が足りず、いったん困難にぶつかると、簡単に自己否定してしまい、とたんに消極的になってしまう。どのように正確に、両言語間の相違を認識させるか、負の転移を減らし、母語の正の転移を増やすか、これはつまり我々中国語教師が真剣に考慮すべき一つの大きな問題なのである。

### 2. 理論背景

新中国の対外漢語教学は正式には1950年にはじまったが、本当に対外漢語教学を一つの学科として見なすようになったのは、それから二十年後の1978年である<sup>1)</sup>。その後、対外漢語教学界の学者と教師たちは、教学の基礎に実践経験を加えつづけ、理論を翻訳紹介したり研究を深めたりして、対外漢語教学に活力あふれた状況を生み出した。現在、対照分析、偏誤分析、中間言語仮説、インプット・アウトプット仮説、互動仮説、コントロールモデル、文化適応モデル、相談処理モデル、及び普遍語法仮説など、対外漢語教師が理解しなければならない基本的な概念はすでに成立している。<sup>2)</sup>よりよい解釈のために、我々はこれからある問題について討論するつもりである。それは第二言語習得と関連している。

中間言語 (interlanguage) とは学習者が目標言語 (target language) を学習する過程において、作り上げる一連の言語産物 (a set of utterances) の集合である。この言語産物の集合は以下のいくつかの特徴を備えている。

- 一、それは厳格な言語体系ではなく、自分独自の体系を具えており、人物・時間・場所などによって多少の変化がある。
- 二、それは学習者が目標言語の音声・語

彙や文法体系によって表そうとした産物であるが、既に目標言語とは異なり、学習者の本来具えている言語体系(母語及び学んだことのあるその他の言語も含む。ただし、習熟度は問わない)とも違ってしまっている。

三、それは固定された体系ではなく、絶えず移行し変化するもので、異なった段階で異なった状態を見せるため、予測性と修正性を具えている。

四、それは完全に間違った表現の集合体や中間言語の発展とは決していえず、内在要因(例えば学生の学習動機、既にある言語知識、言語に対する理解能力など)の影響、外部要因(例えば新しい言語知識のインプット、教師の指導、言語環境など)の影響を受けている。

中間言語の中に出現する、いわゆる目標言語は普通一致した誤用ではなく、我々はそのことを中間言語の言語偏誤(learner's errors)と呼ぶことにした。これら言語偏誤の分析については、言語偏誤分析(error analysis)と呼ぶことができよう。言語偏誤を形成する原因は多く、その中の一つ、非常に重要な原因が言語転移(language transfer)である。

言語転移(language transfer)について、我々は Terence Odlin 1989年の定義を採用したい;「転移とは、目標言語とそれまでに学んだあらゆる言語(まったく精通していないかもしれない)との間にある類似性と差異の影響によって形成される」(Transfer is the influence resulting from similarities and differences between the target language and any other language that has been previously (and perhaps imperfectly) acquired.)<sup>iii</sup>。

言語転移、誤用分析、中間言語理論は理論発展史上前後関係があるが、もちろん言語転移であれ誤用分析であれ、中間言語研究の分

析方法にいたるまで、我々の考えでは、中間言語の誤用を分析するのに有用で、互いに矛盾がないのであれば、なんでも使用し、どの理論体系にも属す必要はないと考えている。

### 3. 言語転移と語順偏誤

#### 3-1. 語順と類型学

アメリカの言語学者 Joseph H. Greenberg は1963年に有名な一本の言語類型学に関する論文「Some Universal of Grammer with Particular Reference to the Order of Meaning Elements (「ある主要な語順に関する語法の普遍的な現象」)」を発表した。論文では、例えば主語・動詞及び目的語の相対的な語順から考察すると、自然言語には理論上六つのタイプが出現すると指摘している。つまり、SOV, SVO, VSO, VOS, OVS, OSVである<sup>iv</sup>。半世紀以来、この六種類の語順タイプをめぐる関連する討論が多く行われてきた。現在、一般には英語は典型的な SVO、日本語は典型的な SOV に属していると認識されている。だが中国語はどのタイプに属しているのか、大きな論争となっており、ある人は SVO に属すと言い、ある人は SOV に属すと考えている。また現代中国語は既に SOV 型の特徴を持つが、SVO 型の構造に基づいているという人もいる<sup>v</sup>。

もし考察する範囲をさらに拡大したならば、我々は英語に代表される SVO 型言語と日本語に代表される SOV 型言語、及び論争される中国語のある種の語順上に興味深い、錯綜した複雑な鏡像(mirror image)関係が表れていることに気がつくだろう。

たとえば、

#### A. 動詞+目的語 (VP)

	動詞+目的語	目的語 + 動詞
英語	eat green tea over rice	
中国語	吃 茶泡飯	
日本語		お茶漬け を 食べる

## B. 名詞と連体修飾語 (NP)

	連体修飾語 + 中心語	中心語 + 連体修飾語
日本語	お茶漬け の 味	
中国語	茶泡飯 的 味道	
英語		The taste of green tea over rice

## C. 介詞／後置詞フレーズ (PP)

	P + NP	NP + P
英語	with spoon	
中国語	用 勺子	
日本語		スプーン で

ここから、具体的な語順において、中国語・日本語・英語の対応関係は想像したほどに簡単ではないことが見てとれるだろう。本論では、我々は類型学の大きな問題には触れない。我々の関心は具体的な語順の問題及びそれに関連する教学上の問題だからである。以下、我々は具体的な事例を通して、日本人学生を教える際に生じる語順の問題について見ていきたいと思う。

### 3-2. 事例一：文中における時間詞の語順偏誤

中国語の時間詞は文中での位置が日本語と基本的に一致しているが、英語とは異なっている。たとえば、「(a 昨天) 我 (b 昨天) 去图书馆了。」というこの文の中の「昨天」は中国語の語順配列では二つの位置が考えられる。一つは文頭 a、もう一つは主語の後で動詞の前である b である。

この文を日本語に翻訳すると「昨日」は日本語の文中でも二つの位置に考えられる。「a. 文頭：昨日私は図書館へ行きました。； b. 主語の後で動詞の前：私は昨日図書館へ行きました。」つまり日本語の時間詞の文中での語順は中国語とは完全に同じである、と言うこともできよう。

これと異なるのが英語の語順である。英語の時間詞も文中には二つの語順が考えられる。「a. 文頭：Yesterday, I went to the library.； b. 文末：I went to the library yes-

terday.」中国語、日本語と比べると、完全に異なった英語の語順配列は、b. 文末である。

時間詞の文中での位置は日本語と中国語では完全に同じなので、我々が初めに予測したのは、日本人学生が中国語の時間詞の語順を学習する際、決して大きな問題は生じないだろうということであった。しかし非常に興味深いことに、日本人学生がこの文法案件を学習していると、明らかに多くの問題が出現したのである。

我々がかつて北星学園大学で中国語を学んでいる153名の二年生にテストを実施したが、そのうち122名がこの問題で異なったレベルの誤答をし、総誤答率は79.7%に達した。これは我々にとっても予測の範囲を非常に超えるものであった。

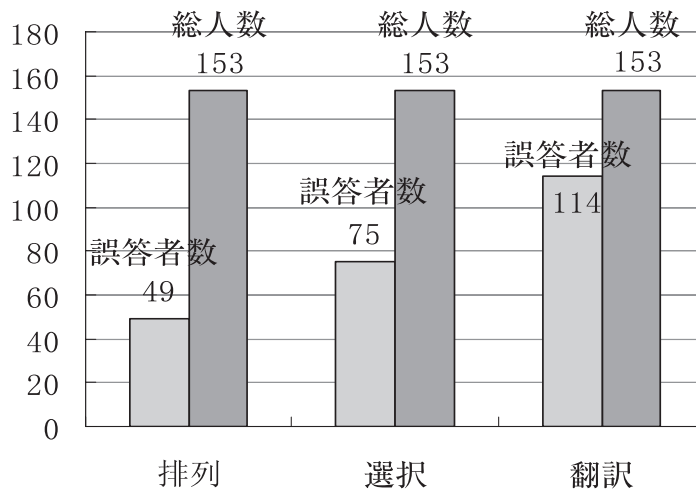
次に、我々が行ったアンケート調査の具体的な状況を紹介しよう。

中国語時間詞の文中での語順問題に対して、我々は三種類の問題を設定した。

- 一、配列（バラバラに出された単語を、正確な文の順序になるように並べ替えるもの。例：「了／我／和／昨天／图书馆／去／他。」正解は「我昨天和他去图书馆了。」)
- 二、選択（a, b, c, d 四つの選択肢から、与えられた単語の正しい位置を探す。例：「(昨天)：你 a 做 b 作业 c 了吗 d？」正解は a)
- 三、翻訳（日本語を中国語に翻訳する。例：「私は2年前に中国に行ったことがあります。」正解は「我两年前去過中国。／两年前我去過中国。」)

具体的な資料は下の表1を参考にしていたきたい。

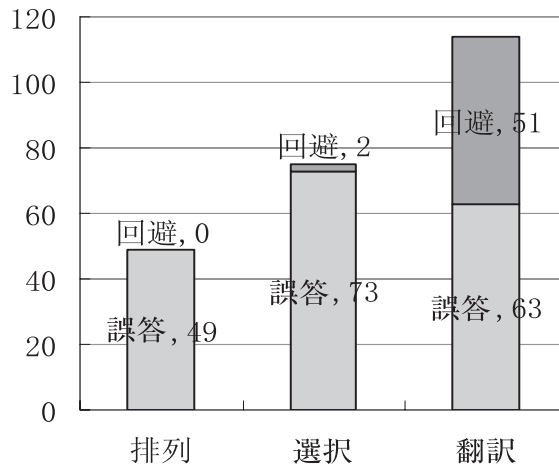
表1 時間詞の語順誤答統計 (北星学園大学二年生)



ほかにも、この問題を解答した学生たちに興味深い対策が見て取れた。ある学生は英語と同じ語順を採用し、我々はそれを誤答と記録した。ある学生は直接回避ストラテジー

(avoidance strategies) をとり、簡単に回避して記した。具体的な資料は表2を参考していただきたい。

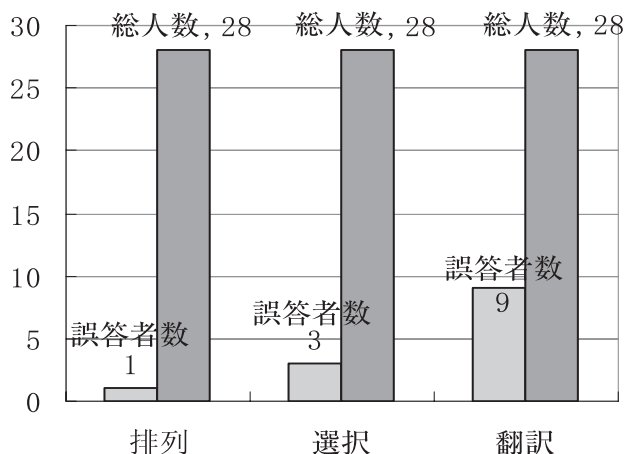
表2 語順誤答タイプの統計 (北星学園大学二年生)



翻訳は三種類の中で最も間違いが多く、これに対しては回避ストラテジーをとる学生の割合も最高であった。これはおそらく問題の難易度とも関連があるだろう。

同じ問題を、我々は北海道大学の一年生にも実施した。総誤答率は46%で、具体的な資料は以下の通りである。(表3)

表3 時間詞の語順誤答統計（北海道大学一年生）



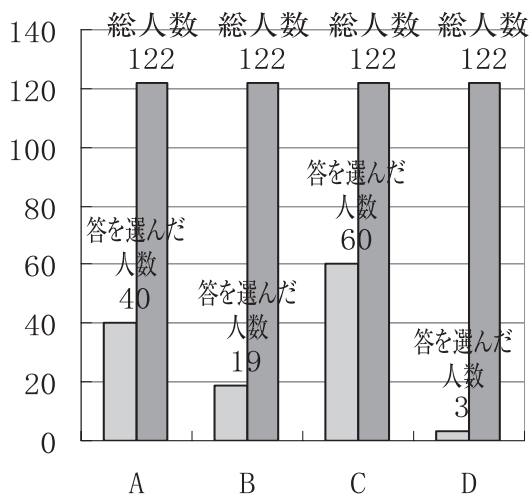
北海道大学の学生は回避戦略をとる者は非常に少なかった。

我々が最も興味を抱いたのは、日中両言語が時間詞の語順配列上、本来は完全に一致しているにもかかわらず、なぜこのような誤答が生じたかということであった。また誤答率がなぜ高いのか。

さらに一歩進んで誤答の原因の所在を明らかにするため、我々は1回目のアンケートを基に2回目のアンケート調査を実施した。調

査対象は1回目間違えた学生たちで、調査した内容は、「中国語と日本語の時間詞は語順上、本来は同じであるのに、あなたはどのようにして1回目のアンケート調査で間違えたのですか？」で、回答は選択肢になっており「A. 中国語と日本語の語順が同じだと知らなかったから。B. 中国語と（ ）語の語順が同じだから。C. どう答えていいか分からなかったから。D. そのほか」である。結果は以下の通りである。（表4）

表4 語順誤答原因の調査（北星学園大学）



Bを選択した者は全員、空欄に英語と記した。Dの選択には、主に三つの答えがあった：a.特に理由はない、ただ感覚に従った；b.おそらく以前にこのような文を見たことがある；c.どうしてか分からない。

以上の調査資料から分かることは、我々は日本語の語順規則がこれらの点において正の転移を生じていない、とははっきり分からないということである。表4の資料の中で、我々は間違った根本的な原因を見つけ出すことはできなかったが、次のように解釈することはできるだろう。

- 一、学生はこの文法案件に対して完全に理解していない（Cを選択したことと関連している）。
- 二、先生はこの文法案件における、日中両言語の語順配列の一致性を重点的に強調していない。もしくは教師は説明したのだが、学生自身が真面目に聞いていなかった。（Aを選択したことと関連する）
- 三、英語の影響を受けた。（北星学園大学の学生でBを選択したのはたった19名であった。しかし面白いことに、北海道大学で誤答した学生たちのうち11名は直接英語の語順に影響されたと回答し、2名が理由は分からないと答えた。（北海道大学では誤答の原因を直接面接して尋ねた）。

四、主なデータは主語と動詞であって、時間詞は二次的なものであったため、時間詞は文末に置かれた。

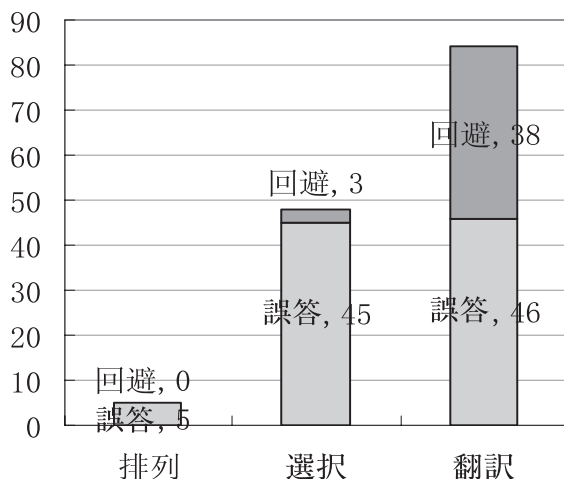
### 3-3. 実例二：共格介詞句の語順偏誤

中国語の共格介詞句はそれ自体の語順は日本語とは反対であるが（3.1のcを参考されたし）、共格介詞句の文中における語順は日本語と同じである。つまり、共格介詞句を一つのかたまりとして見ると、文中の位置は主語の後ろで動詞の前になり、やはりこの点で英語とは異なっている。例えば、「我和你一起去。」日本語：「私はあなたと一緒に行きます。」英語：「I go with you。」この種類の語順問題について、我々は三種類のタイプの問題でアンケート調査を行った。

- 一、配列（バラバラに出された単語を、正確な文の順序になるように並べ替えるもの。例：「了／我／和／昨天／图书馆／去／他。」正解：「我昨天和他去图书馆了。」）
- 二、選択（a, b, c, d 四つの選択肢から、与えられた単語の正しい位置を探す。例：「(和朋友)：他 a 去 b 看 c 棒球 d 比赛 e。」正解 a。）
- 三、翻訳：「あなたは誰と一緒にきましたか？」正解は「你是和谁一起去的？」  
以下、具体的なデータを見てみよう。  
(表5)



表5 共格介詞句語順の誤答統計（北星学園大学）



この句の誤答率は明らかに非常に少ない。配列の5例の誤答はすべて文末に置いてあった。選択の45例の誤答中14人はeを選択、つまり文末を選んだ。その他の31人はb, c, dのどれかを選んだ。翻訳の誤答46例中、31人が共格介詞句を文末に置き、15人が介詞を削除した。

北海道大学の28名の学生で配列を間違えた者は一人もおらず、選択では5人が間違い、全員がbを選んだ。翻訳問題はテストしていない。

一般常識から言うと、この文法案件は実例一の文法案件よりいささか難しい。というのも、先の文法案件には二例とも「昨天」という単語があり、一例には「两年前」という句があって、この文法案件には介詞句だからである。実際、この文法案件に表れた誤答は、先の文法案件よりもずっと少ない。ここでは、言語転移（日本語を母語とする正の転移と英語の負の転移）が作用しているのかどうか、我々は現時点でははっきりした結論を下すことはできない。

ただ文法上から考えると、次のように解釈することができるかもしれない。共格介詞句

と核となる動詞の関係は比較的ゆるやかで、動詞の配価（value）とは関係ない。この角度から見れば、我々はこうも言えるかもしれない。文の核となる動詞とは比較的近く、動詞の配価に属する連用修飾語は文の核となる動詞よりも比較的遠い、また動詞の配価に属する連用修飾語より負の転移の可能性が低い、と。

#### 3-4. 実例三：比較文における比較項の語順偏誤

比較文における比較項は、中国語では決して唯一の表現形式というわけではない。中国語は介詞句を用いた方法で表現することができる。例えば、「我比她高。」はより複雑で動詞と結合した複合形式、例えば、「和她相比，小李要更高一些」を用いることもできる。介詞句の表現は比較的簡単で、比較文を教える時にはまずここから教えなければならない。

日本語の比較文では、「私は彼女より背が高い。」のように、格助詞は後置詞で中国語とは異なっている。しかし前置詞（介詞）であろうと後置詞（格助詞）であろうと、構成する句はすべて動詞の前であり、「I am higher than her.」のように英語の介詞句が文末に置く表現であるのとは異なっている。



それではこのような文法案件は学生が習得する中でどのような誤用が生じるのであろうか。ここにおいて、我々は一つのアンケートを実施した。アンケートの方式は一種類のみで、日本語を中国語に翻訳するものである。

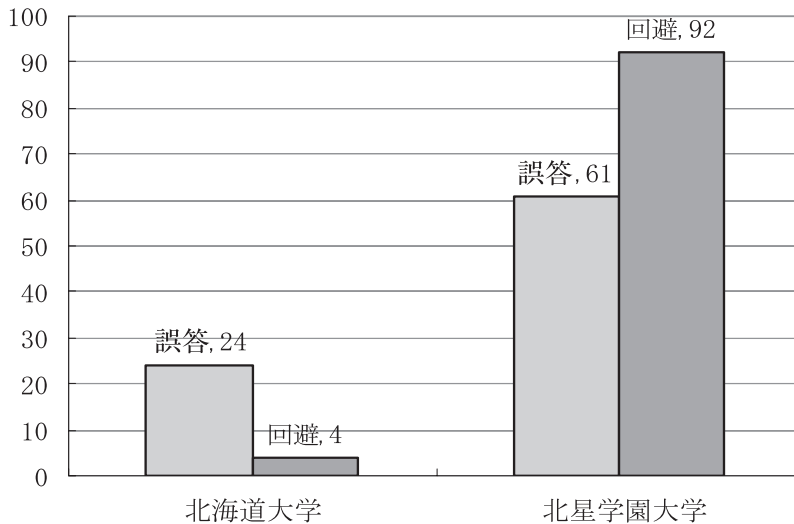
実例；日本語を中国語に訳しなさい。「彼は洋食より和食の方が好き」。参考解答は「和西洋料理相比，他喜欢日本料理」。

ここで我々が一言説明しなければならないのは、このような複合形式の比較文は、我々の授業ではまだ教えていないということである。そのためこのアンケート調査は、学生たちが簡単な比較文を学んだ後で比較的複雑な比較文に出会った場合どのような方策をとるかを、また同時に言語転移の影響（日本語或いは英語）が表れるかどうかも見てみたかった

たのである。

以下は我々が目にした具体的なアンケート結果である。この文法案件の誤答率は100%で、北星学園大学の153人のうち一人も正解はなかった。北海道大学28人も全員誤答した。学生たちが解答する際にとった方策もバラバラで、あっさり放棄する者（回避ストラテジー）もいれば、一種の訓練上の転移（transfer of training）を行う者、比較文と「比」という語を対等に取り扱う者などである。英語や日本語の言い方を参照する者もいたが、どの表現方法を参照しようとも、すべて中国語の「比」を使用しており、しかもその「比」は比較項の前に置かれていた。下の表6、参照。

表6 比較文における比較項の語順偏誤



大多数の学生は翻訳する時に、次のような二種類の語順を採用した。一、「他喜欢吃（直接「好」と書いた者もいたが、これは日本語で「好き」という意味である）日本菜比西洋菜。」二、「他和食比洋食好（「喜欢」や「爱」を使った者もいる。）」

どちらであれ、比較関係は両方とも間違っている。これはこの文法案件が語意的な関係では比較的単純明瞭であるため、教学においても比較文の表現形式は力を入れて講義されているのだと説明することができよう。

## 4. 習得・教学と偏誤分析

### 4-1. 外国語の習得は一つの複雑な工程で、 その中でも内在・外在要因に大きく関わっている。

内在要因とは、学生の学習動機、学習熱意、学生が既に有している言語知識、知識水準、理解能力などのことである。外在要因とは、教師の教授技巧、教室の雰囲気、クラスメート間の相互作用や影響、教材の難易度、練習計画などである。どの要因もすべて学生の学習効果に影響を与える。そのため、教師は教学において毎回すべての授業で入念に計画し、周到に準備し、絶えず自らを向上させ、己の知識構造を新しくしなければならない。

現在、国家汉办は国際先進言語教学理念的対外汉语教师培训模式（国際先進言語教学理念的対外漢語教師養成モデル）を制定し、5P教学法を提唱した。5Pとは、内容のヒントを与える、教師が詳しく講義する、事例を分析する、模擬練習をする、成果を展示する、の五つで、それぞれについて対外漢語教師に新しい挑戦を行い、新しい教学モデルを本当に身につけるよう要求、すべての教師は必ず自ら努力し、ふさわしい時と場所、及び学生たちに最適な方法とやり方を探し求めなければならないとしている。

### 4-2. 学生の、中間言語に出現する偏誤は 多種多様である。

偏誤分析も同様に一つの複雑な工程である。偏誤分析において、先入観は必ず避けねばならないし、客観的な事実から出発して、丹念にアンケート案を計画、その後で比較的科学的な結論を得ることができよう。我々が今回行ったアンケート調査の収穫は大きいと言えようが、失敗も多かった。失敗の原因は大きく分けて二つある。

第一に、我々はまず小さな範囲（28名の北海道大学の学生）を調査したことにより、

先入観を生じさせてしまったことである。言語を越えた言語転移が存在する、つまり英語の負の転移が存在すると認識してしまったのである。それで慌ただしく調査範囲を拡大したため、それほど良い2回目のアンケート案を設計できなかった。

第二に、調査案がいささか分散し、多くの予想外の要素にまで波及してしまったことである。例えば、二つの調査案の一つの文中に入れてしまったり（配列問題の「昨天我和他去图书馆了」）、選択例を複雑にしすぎたり（選択問題の「他和朋友去看棒球比赛」で、述語部分に連動句構造を採用した）、偏誤原因を緻密に調査できるものではなかった、などである。

けれども、このアンケート調査は完全な失敗とも言えない。成功した点として多少予想外ではあったけれども、我々は非常に大きな収穫を得たのである。具体的には以下の通りである。

第一に、我々は中間言語に出現するそれぞれの偏誤を知った。その原因はすべて決して単純ではないということ、偏誤の出現は多くの原因にひきずられており、たとえば学生自身の知識水準と学習に対する積極性の違い（北海道大学と北星学園大学のアンケート調査に出てきたデータの違い）、問題の難易度（翻訳問題の難易度が最も高く、偏誤の出現率も最高であった）、さらにはアンケートの中身そのものの設計や配列が与えた調査結果への影響（例えば配列問題で我々は実際に2問提示し、2番目の文の配列は次のようであった。「准备/什么/你/干/下个星期天/?」正解は「你下个星期天准备干什么?」この文で誤答した学生は最初の配列問題よりもずっと多かった。89人が間違ったが、うち88人が誤答、1人が回避であった。実際の回答結果から見ると、「下个星期天」という単語は「昨天」よりも難易度が高く、それが原因の一つであろう。アンケート自体もこの語が文末に

置かれていたことが、或いは誤答の原因の一つになったかもしれない)。

第二に、偏誤分析は人・場所・調査案と調査方式などの違いで異なってくるということである。これは言語転移・偏誤分析・仲介言語分析など第二言語習得理論と方法が、絶えず否定され更新されているのが原因の一つであろう。しかしどのように言おうとも、実地調査と分析を行いさえすれば、必ずある程度の新しい認識と収穫を得るはずである。

第三に、学生が中間言語を生み出す時、大脳の活動は多方位に渡っており、一人一人が採用した方策もすべて異なり(もちろん共通性はあるが)、甚だしい場合には各問題で採用した方策がどれも統一されておらず、多種多様なやり方が同時に用いられているものさえある。したがって、中間言語の分析は研究手段と方法を絶えず更新していかなければならないだろう。

#### 4-3. 言語転移並びに偏誤を生み出さない 唯一の原因、偏誤を作り出す重要な原因。

我々が今回行った調査は、英語の負の転移が実際に存在していると証明するだけのデータを示すことはできなかったが、興味深いことに、直接中・日・英三カ国語の構造を対比して学生たちに説明したところ、大多数の学生が自分は英語の影響を受けたのだと言ったのである(北海道大学の学生がこれらあてはまる)。またさらに興味深いのは、北星学園大学のアンケート結果で、4名の学生が直接英語を用いて翻訳したのである。例えば、「我去了中国两年 ago」,「他喜欢日本饭 than 西洋饭」(この4名はすべて英文学科)。これらの事実は英語の負の転移の影響が確実に存在していることを否定できないことを示している。

ここから分かるのは、この種の偏誤の発生は多言語の転移によって作り出されたという、少なくとも一つの原因が考えられよう。この

ような負の転移を生み出すさらに深い原因は日本人学生のいわゆる「外国語」への認識が源であると思われる。日本人学生が最も早く接触する外国語は英語である。日本人の「中国語も外国語である」という客観的、科学的な認識は前世紀の50年代に明確に発言されている。(安藤彦太郎・1988) そのうえ、今日にいたるまで、非常に多くの学生が中国語に対する不正確な認識をもっている。初級段階のある時期では英語(彼らにとっての「外国語」)を用いて「創造」する。このため、我々は中国語の最初の段階を教えるにあたっては、必ず彼らに「中国語も外国語である」と告げ、彼らに中国語を外国語とし学ぶべきものであると、一種の科学的な認識による重要性を語らねばならないのである。

#### 4-4. 三言語の語順偏誤の現象から、日本人学生が中国語を学習する時に言語転移の影響を受けることを軽視してはいけないという事実について。

これらの現象に対して、我々は日本人学生に初・中級中国語を教える際には、以下のいくつかの問題について注意しなければならないと考える。

- 一、 異なった言語間の差異を正確に認識する。中国語と日本語間の問題だけではなく、学生がもともと有している他言語の知識とも関係する。日本の中国語教学について言えば、中国語は日本人学生によれば本当に意味での第二言語ではなく、第二外国語もしくは第三外国語なのである。そのため授業中に各言語間の差異を正確に認識して、学生に中国語をよりよく理解させることは疑いもなく大切な点である。
- 二、 日中両言語の共通性を適宜利用して、母語の正の転移を増大させる。中国語と日本語は異なった部分かがたくさん

あるのは間違いないが、同じ部分も少なくない。同じ部分を学生に告げれば、学生の学習負担も軽減されるだろうし、相違点を学生にしっかり告げれば学生が学習する時に母語の負の転移を受けるのを減少させる手助けになるだろう。

- 三、言語転移によって生み出される偏誤を正確に分析し、客観的に学生の学習成果を評価すれば、学生が言語知識を獲得し正確に運用するのによりよい手助けになるであろう。ある種の間違いは偏誤によって作り出されたかどうかは結論を出しにくい、学生にそういった転移の可能性があることを伝えることによって、関連する言語知識を学生が獲得する手助けになるだろう。彼らに客観的に自分の生み出した中間言語を認識させることもできよう。言語転移の理論も、教学中に出現するすべての問題点を正確には予測しえないが、少なくとも我々がより客観的に、全面的に中間言語現象を認識する手助けとなるにちがいない。

- 
- i 赵金铭主编 2004：《对外汉语教学概论》，P. 1  
 ii 国家汉语国际推广领导小组办公室编 2007：《国际汉语教师标准》，P. 31  
 iii Terence Odlin .(1989). Language transfer, P.27  
 iv 陆丙甫, 陆致极译介, (1984), P.P.45-60  
 v 曹聪孙, (2001), P. 79；竹沢幸一・John Whitman 著, 中右実編, (1998), P.P.104-136

## 主要参考文献

Diane Larsen-Freeman.& Michael H.Long. (1991) . An Introduction to Second Language Acquisition Research. Longman Group UK Limited.

蒋祖康导读, 北京：外语教学与研究出版社  
 2000年8月第1版, 2009年3月第6次印刷

Jack C. Richards(ED.).(1974). Error Analysis. Longman Group UK Limited, Tenth impression 1990.

Terence Odlin. (1989) . Language Transfer. Cambridge University Press, Fourth printing 1994.

JACET SLA 研究会, (2000)：SLA 研究と外国語教育—文献紹介—, リーベル出版

テレンス・オドリソ著, 丹下省吾訳, (1995)：言語転移, リーベル出版 (Liber Press)

山岡俊比古, (1997)：第2言語習得研究<新装改訂版> 株式会社桐原ユニ, 平成9年5月20日第1刷

王顺洪, (2008), 日本人汉语学习研究, 北京大学出版社

西垣内泰介・石居康男著, (2003)：英語から日本語を見る (英語学モノグラフシリーズ 13 原口庄輔・中島平三・中村捷・河上誓作 編), 研究社 2003年6月30日初版発行

安藤彦太郎, (1988)：中国語と近代日本, 株式会社岩波書店2月第1刷

竹沢幸一・John Whitman 著, 中右実編 (1998)：格と語順と統語構造, 日英語比較選書9, 研究社出版株式会社, 初版

吴丽君等, (2002)：日本学生汉语习得偏误研究, 中国社会科学出版社

陆丙甫, 陆致极译介, (1984)：某些主要跟语序有关的语法普遍现象, 《国外语言学》第2期, 45-60

国家汉语国际推广领导小组办公室, (2007), 国际汉语教师标准, 北京：外语教学与研究出版社

鲁健骥, (1984)：中介语理论与外国人学习汉语的语音偏误分析, 《语言教学与研究》第3期

鲁健骥, (1993)：中介语研究中的几个问题, 《语言文字应用》第1期

張麟声, (2001)：日本語教育のための誤用分析—中国語話者の母語干渉 20 例— 株式会社スリーエーネットワーク, 2001年10月10日初版第1刷

※本論は2008年12月に発表した『語言遷移与語序偏誤』(「第九届世界華語文教學檢討會論文集第二冊 語言分析(2)」)を翻訳, 改稿したものである。

[Abstract]

## Language Transfer and Word Order Errors

Noriko YAMAMOTO  
Changji JIN

Language transfer plays a very important role in the process of learning a foreign language as a second language. Language transfer can be divided into two types, namely, positive transfer and negative transfer. In this paper we will focus on the analysis of word order errors that Japanese students tend to make when they learn Chinese. This paper discusses three types of word order errors as follows, that is, in relation to the use of : temporal words or phrases, prepositional phrases and comparative expressions. The authors assert that language teachers should have a sound knowledge of a variety of languages, and that they should also be able to analyze the errors that students make correctly. Correct linguistic analysis can help us make the teaching of foreign languages more successful.

---

Key words : Language Transfer, Word Order, Error Analysis, Language Acquisition